

地球の病気

富山県農村医学研究会

理事 越山 健二

地球が出現してから45億年ともいわれる。地球科学が活気をおび、生命の起源、大陸や海洋の成因、太陽系と宇宙など、新しい発見や新事実が魅惑的に報道されて、関心が高まっている。地球は太陽系の一惑星として、こんごも数十億年から数千億年も存在しつづけるといわれ、全く気が遠くなるような話なのである。

表題にあげた“地球の病気”、というところでもあり、反発もあると思うが、近視眼的な思考を承知のうえで、あえて地球の病気について述べてみたい。

地球上に生物が発生したのは、約35億年前の事で、すべての生物は、適者生存、弱肉強食の生存競争を繰り返し、優性遺伝、突然変異を経ながら、それぞれ、進化の過程の中にあり、すべては人智の計を越えた、自然界の摂理、自然の輪廻ともいえる秩序とバランスによって、整然と行われ今日に及んでいる。

今日地球上には、植物が約1,000万種、動物は約500万種が生息し、種を保ちながら、連綿として生きつづけている。これ等の生物の霊長が私達人類である。数百万年前から出現し、消長を繰り返し、約150万年前頃からホモ・サピエンス、即ち知慧のある動物として地球上に君臨しているのである。

人間は他の生物にみられないすぐれた脳を持ち、起立して、道具を使い、火を用い、言語を作るなど、常に創造的な思考の中で、環境をくらし易く、地球を上手に利用して、輝かしい文化を造りあげてきた。

長い人間の歴史の中で、私共の知りうる過

去は殆ど推定や想像によるものであるが、比較的にはっきりとした記述は、紀元後僅か2千年に満たないのである。

僅か4、5百年前からはじまった、ルネッサンス及び産業革命以来、人間の暮らしは、飛躍的に大きな変化をきたしたようだ。特に20世紀後半からはじまった、科学・技術の進展は、一部の国において、物質文明の頂点にあるともいえるものである。

僅か数百年前に、5、6億の人口が今日10倍近くに増加し、21世紀はじめには、60数億に達するといわれ、まさに、地球上における異常な人口爆発がおこっているのである。

人口爆発は、必然的に食糧・水・エネルギーの不足を来し、自然環境破壊、各種の摩擦、精神のいらだち、人間格差による争い等、多くの深刻な悩みが山積してきたように思う。

食糧を得るため多くの表土が荒らされ、熱帯雨林が狭められ、耕地は農薬や除草剤におかされ、有機物が少なくなり、他の生物の生存があやふまされてきた。生態系が破壊されて、一部には、砂漠化がすすむという報告もある。地球が数億年かかって蓄えたエネルギー源の石炭、石油は掘り出され、枯渇直前の状態にあり、他の埋蔵資源も急激に、減少しているという。

過去百年間に3千6百億トンの炭酸ガスが大気中に注ぎこまれ、切り開いた森林の土壌からも同量の炭酸ガスがはき出されたという。大気中の炭酸ガスが13%も増加し、そのため地球の温度が摂氏0.5度上昇した。更に21世紀のはじめには排気ガスは、一兆トンに及び

地球の温度は摂氏2度上昇するとも予測されている。それはやがて氷河期の終りを意味し人間の生存に大きな負担が予想されている。

更に最も危険と思われるものに核物質がある。それが地球上の各地に蓄えられ、日々増加し、その爆発は、人間はもとより、すべての生体を消滅するものである。まさに地球が内臓した癌細胞といっても過言でないような気がする。すべての生物は生きるために、利己的に運命づけられ、攻撃的な本能を持つが、自然の摂理に従って、それぞれのいのちの調和を保っている。

ひとり人間は、知、情、意に象徴されるよ

うに、高度に発達した脳の働きにより、自然に抗し、他の生存を無視して、まさに、怪物とも言える力を行使してきた。

人間は地球を離れて生存は出来ず、他の生物の存在なくしては生きられない。

いま、地球の病気ともいわれる現象の中で、私共人間は、生命そのものを考え、生命の畏敬を知り、生態系を守り、いたずらな生命の殺戮をさけ、新しい生命倫理の上になつべきときである。地球の資源は、有限であり、資源のサイクルを考え、新しい生存秩序の時代を迎えたのである。